

1 はじめに

本報告は、令和7年度学校経営計画に基づき、本校における教育活動及び学校運営の状況を整理し、成果と課題を明らかにするとともに、次年度の学校経営計画策定に資することを目的として作成したものである。

本校では、生徒が入学後にどのような学びや学校生活を送り、その経験が進路選択や将来像の形成にどのようにつながっているかという観点を重視して学校経営を行ってきた。本報告においても、その視点を踏まえ、取組の経過及び学校としての評価・判断を中心に記述する。

また、教育活動の質を維持するとともに、生徒及び教職員が無理なく学びや指導に向き合える学校運営の在り方についても、重要な視点として位置付けている。

2 学校経営の基本方針

本校は、校訓「自主・誠実・英知」のもと、教養主義に基づく学習活動を通して、幅広い教養と確かな学力を備え、自ら考え行動できる生徒の育成を目指している。

令和7年度は、TOKYO Global Education Network 20（TOKYO GE-NET20）指定校としての国際理解教育及び英語教育の充実、並びに探究的な学び推進事業（TIPS）指定校としての探究的な学びの導入を、学校経営の柱として位置付けた。また、高等学校DX加速化推進事業（DXハイスクール）の採択を踏まえ、ICTを活用した学習環境の整備と授業改善を進めた。

スクール・ミッション及びスクール・ポリシーについては、学校経営計画に示した内容を継承し、教育活動全体に反映させている。

3 今年度の重点目標とねらい

令和7年度は、次の三点を重点目標として学校経営を行った。

第一に、探究的な学びを学校教育活動の中核に位置付け、年次進行による導入を進めることである。導入初年度であることを踏まえ、取組の拡充よりも体制整備及び教員間の共通理解の形成を優先した。

第二に、TOKYO GE-NET20 指定校として、国際理解教育及び英語教育の取組を学校全体に位置付け、授業と行事・交流活動との関連を意識した運営を行うことである。

第三に、行事、部活動、授業のバランスに配慮しながら、教育の質を維持し、教職員が無理なく教育活動に取り組める学校運営体制を整えることである。

4 成果・課題と次年度に向けた対応

（1）学習指導

〈取組の概要〉

探究的な学びの本格導入初年度として、進路・探究部主幹教諭等を中心とした体制を整え、年間指導計画の作成及び校内共有を進めた。

〈成果〉

探究の年間計画を整備し、授業としての位置付けを明確にした。教員間で目的や進め方の共通理解が進み、学校全体で探究的な学びを支える基盤を整えることができた。あわせて、DXハイスクールの採択を踏まえ、ICT環境の整備を進め、資料共有や情報収集等において探究活動及び授業改善を支える基盤づくりを行った。

また、「情報Ⅰ」において定期考査をオンラインで実施した。採点にあたっては、マークシート方式を取り入れるなど、リアテンドント等のICTツールを活用した採点手法が教員間に浸透し、採点の正確性及び効率性の向上が図られた。これにより、評価の在り方を工夫しながら、教員の負担軽減にもつながる取組として一定の成果が見られた。

〈課題〉

探究と教科指導、学校行事との両立により、教員の業務負担が課題として顕在化した。評価の観点や方法については、引き続き整理が必要である。

〈評価・判断〉

導入初年度であることを踏まえ、取組の拡充よりも体制整備と共通理解の形成を優先した判断は妥当であったと判断している。

〈次年度に向けた対応〉

評価基準の整理を進めるとともに、教科横断的な取組の具体化を図る。

(2) 進路指導

〈取組の概要〉

三年間を見通したキャリア教育を継続し、模試分析、進路行事、個別面談等を通じて、国内大学への進学を中心とした進路指導を計画的に実施した。学年ごとの指導内容や時期を整理し、生徒一人一人が自身の進路を主体的に考えられるよう、段階的な支援を行った。

〈成果〉

学年・教科間で進路情報の共有が進み、進路指導に対する教職員の共通理解が深まったことで、生徒の進路意識の向上につながった。

さらに、昨年度に実現した国立台湾大学との進学に係る提携に引き続き、本年度はイギリスの国立アングリア・ラスキン大学とも新たに提携を行った。これにより、従来の国内大学進学を基盤としつつ、海外大学進学という選択肢を現実的な進路の一つとして提示することが可能となり、生徒の進路観の広がりや国際的な学びへの関心の喚起につながった。

〈課題〉

模試結果等のデータ活用の在り方や学年間での情報共有方法については、さらなる工夫が必要である。また、多様化する進路選択に対応するため、教員側の指導観や支援方法についても継続的な整理が求められる。

〈評価・判断〉

国内大学進学を基本とした進路指導体制は安定して機能しており、その上で海外大学との提携を含む新たな取組を加えたことは、生徒一人一人の進路観を広げる有効な取組であったと判断している。進路指導を、単なる進学決定にとどめず、生徒の将来像の形成につなげる視点で展開でき

た一年であった。

〈次年度に向けた対応〉

探究活動との接続を一層重視し、生徒が探究で培った関心や思考を言語化して進路選択につながられるよう支援を強化する。その一環として、総合型選抜や学校推薦型選抜（公募制）への対応を充実させ、国内大学進学を含めた多様な受験形態に主体的に挑戦できる指導体制を整えていく。

（３）生活指導

〈取組の概要〉

挨拶・身だしなみ・時間管理の指導、安全教育、教育相談体制の充実に取り組んだ。

〈成果〉

予防的な生活指導が定着し、生徒が安心して学校生活を送るための基盤を維持することができた。教職員間での情報共有を重視した対応により、課題が深刻化する前段階での支援が可能となり、大きなトラブルに至る事案を未然に防ぐことができた。

〈課題〉

SNS を介した軽微なトラブルが一部で見られたことから、情報モラルに関する継続的な指導と早期対応の重要性が改めて確認された。

〈評価・判断〉

日常的な声かけと組織的対応を基盤とした生活指導体制は概ね機能していると判断している。

〈次年度に向けた対応〉

次年度より開始される通級による指導を踏まえ、生徒一人一人の特性や困り感に応じた支援体制の整備を進める。

（４）特別活動・部活動

〈取組の概要〉

学校行事の主体的運営、部活動の計画的実施、国際交流事業を推進した。

〈成果〉

学校行事や部活動を通して、生徒の協働意識や達成感の醸成につながった。外部指導員の活用により、専門的な指導が可能となり、活動内容の充実が図られた。

〈課題〉

取組が多岐にわたり、実施時期や学習とのバランスを含めた整理が求められる。

〈評価・判断〉

量的な充実は図られた一方で、取組の体系化については今後の課題であると判断している。

〈次年度に向けた対応〉

授業との関連を意識した国際理解教育の整理を進める。

（５）募集対策・広報

〈取組の概要〉

学校説明会、見学会、WEBを通じた情報発信を行った。あわせて、塾関係者を対象とした説明会を実施し、本校の教育内容や特色について直接説明する機会を設けた。また、生徒が主体となって学校生活や学びを伝える説明会・見学会を実施した。

〈成果〉

外部から得た知見を踏まえ、Web や SNS を活用した情報発信を工夫した結果、私学授業料無償化の影響がある中においても、入学者選抜の倍率は前年度並みを維持することができた。

〈課題〉

情報発信の内容や対象に応じた工夫が引き続き必要である。

〈評価・判断〉

継続的な広報活動の基盤は維持できたと判断している。

〈次年度に向けた対応〉

DX 技術を活用した広報活動を推進し、デジタル広告や動画活用、英語による情報発信等を段階的に進めていく。

（６）学校運営・組織

〈取組の概要〉

企画調整会議を中心に業務の共有と効率化を進めるとともに、校内資料のデジタル化を図った。

〈成果〉

属人化の抑制と引継ぎ意識の向上が見られた。部活動における外部指導員の配置により、教員の業務負担軽減にも一定の効果が認められた。

〈課題〉

業務量の偏在については、引き続き改善が必要である。

〈評価・判断〉

教育の質を維持しながら業務改善を進める体制は、一定程度整ってきたと判断している。

〈次年度に向けた対応〉

役割分担の整理と業務の精選を進める。

５ 数値目標の達成状況

数値目標については以下のとおり整理し、成果と課題の把握に活用した。

○学習指導

教員相互授業参観：年 3 回／実績 6 回

若手教科研究授業：年 24 回／実績 24 回

探究発表会（校内／校外）：年 2 回／実績 1 回

探究テーマ設定率（１年）：98％／実績 100％

学習時間平均（平日／休日）：1 学年 120 分／180 分／実績 45 分／ 60 分

2 学年 120 分／180 分／実績 54 分／ 93 分

3 学年 120 分／180 分／実績 202 分／261 分

英検 2 級以上合格者：300 名／実績 268 名

○進路指導

模試分析・指導：年 3 回／実績 3 回

学年別進路指導（1・2・3 年）：年 3 回／実績 3 回

国公立大学現役合格者数：10 名以上／実績 14 名

難関私立大学現役合格者数（含 GMARCH 等）：150 名以上／実績 157 名

卒業時進路決定率：100％／実績 98％

○生活指導

特別指導件数：0 件／実績 0 件

避難訓練：年 4 回／実績 4 回

学校満足度（生徒／保護者）：85％／90％／実績 89％／94％

○特別活動

部活動加入率（1 年／2・3 年）：100％／90％／実績 87％／97％

国際交流事業数：2 件／実績 2 件

海外修学旅行・海外語学研修等：実施／実績（行先：台湾・アメリカ合衆国・イギリス）

○募集対策・広報

学校説明会来場者数：4,000 名／実績 6,310 名

WEB 更新回数：200 回／実績 335 回

一次応募倍率（普通科／外国語）：1.13 倍／1.13 倍／実績 1.44 倍／1.55 倍

○学校運営・組織

部活動指導員：18 名／実績 18 名

男性教職員の育業取得：2 名／実績 0 名

年休取得（年 10 日以上）：80％／実績 77％

夏季休暇取得：100％／実績 100％

6 総括

令和 7 年度は、探究的な学びをはじめとする新たな取組を、学校全体として推進した一年であった。導入初年度として、取組の拡充よりも体制整備と教員間の共通理解の形成を優先した判断は適切であり、学校経営として一定の成果を得ることができたと評価している。

一方で、評価の在り方や行事配置、生徒支援の体制整備等、次年度以降に向けた課題も明確になった。本年度の成果と課題を踏まえ、次年度は取組の定着と質の向上を図りながら、学校全体として持続可能な教育活動の推進に努めていく。

7 令和 8 年度に向けた課題と方向性

令和 7 年度の取組及び評価・判断を踏まえ、令和 8 年度は、各分野における取組を整理・深化させる段階と位置付ける。

第一に、探究的な学びについては、導入期から定着期への移行を見据え、指導内容の精選と評価基準の整理を進める。あわせて、各教科の学習と探究活動との関連を一層明確にし、教科横断

的な取組を段階的に具体化していく。

第二に、国際理解教育及び英語教育については、TOKYO GE-NET20 指定校としての取組を整理し、授業・行事・交流活動が相互に関連する形で体系化を図る。また、海外大学との提携を含めた取組を生かし、生徒の関心や学びが進路選択につながる指導の充実を図る。

第三に、進路指導においては、探究活動との接続を一層重視し、生徒が自らの学びや経験を言語化して進路に結び付けられるよう支援する。その一環として、総合型選抜や学校推薦型選抜（公募制）への対応を強化し、多様な資質や意欲が評価される進路選択の在り方を推進していく。

第四に、学校運営及び生徒支援の面では、DX を活用した業務改善や情報共有を進めるとともに、次年度より開始される通級による指導を含め、生徒一人一人の特性や状況に応じた支援体制の充実を図る。また、情報モラルに関する継続的な指導を通して、SNS を介したトラブルの未然防止と早期対応に引き続き取り組む。

さらに、近年の気候変動による暑熱環境への対応や、高校第3学年における受験準備と学校行事の両立に係る負担についても、学校全体の課題として整理する必要がある。これらを踏まえ、生徒の健康と学習環境の確保の観点から、令和9年度以降を見据え、学校行事の時期や配置の見直しについて検討を進めていく。教育的意義を損なうことなく、安全性と学習の継続性を確保した教育活動の実現を目指し、計画的な協議を行っていく。